島根大学教育学部紀要（教育科学）第27巻　37頁〜44頁　平成５年12月

コーチの社会的勢力と選手の適応感との関係

伊藤豊彦＊・遠藤俊郎＊＊

Toyohiko Ito and Toshiro Endo

Coaches' Social Power and Player's Adjustment for School Teams

問　　題

スポーツの指導者（以下，コーチと呼ぶ）が選手に対して行う指導の効果は，選手の競技成績の向上に重要な意味を持っていると考えられる。したがって，コーチが選手に対してどのような指導を行えば，コーチが意図する方向へ選手を導くことができるかという問題は，コーチにとって重要な問題の１つである。

ところで，コーチがある指導を行い，選手がそれを受容したり，あるいは拒否したりするという一連の過程は，社会的な影響過程の１つとしてとらえることが可能であり，コーチが選手に影響を及ぼすことができた場合，コーチに何らかの社会的勢力（social power）が備わっているからだと考えることができる。社会的勢力とは，一般に，潜在的な影響力と定義されるが，それがいったん顕在化すると，勢力の強さの程度によってその効果が異なるのは当然であるが，どのような勢力に基づいて影響を試みているのかという勢力の種類によっても異なることが予想される。

たとえば，田崎（1984）は，小学生を対象に，教師の社会的勢力（田崎の用語では，勢力資源）として，親近・受容，罰，正当性，外見性，明朗性の５つを抽出し，児童のモラールとの関連を研究している。その結果，児童が教師の社会的勢力として，親近・受容，正当性を強く認知し，かつ罰を弱く認知している場合はモラールが高いのに対して，逆に，罰を強く認知し，正当性が弱い場合はモラールが低い傾向があった。また，教師の社会的勢力と生徒の逸脱傾向との関連を研究した田崎（1987）の結果でも，教師の社会的勢力の基礎に親近・受容，正当性，明朗性を強く認知している生徒は逸脱行動が少ないのに対して，教師の社会的勢力の基礎に罰を強く認知する生徒は逸脱行動が多い傾向にあるとしている。

一方，スポーツ心理学の領域では，森・伊藤・豊田・遠藤（1990）が，スポーツ指導場面におけるコーチの社会的勢力として，専門・参照，罰，利益，指導意欲，正当，親近・受容の６つを抽出し，それぞれの勢力の効果をコーチからの被影響感，コーチへの満足感などとの関連において検討している。この結果，コーチの有する利益勢力と指導意欲勢力を高く認知している選手ほど被影響感や満足感が高いのに対して，コーチの勢力として罰勢力を認知している選手ほど満足感は低いものであった。

また，伊藤（1992）は，コーチの社会的勢力と選手の動機づけを規定すると考えられる原因帰属様式との関連を検討している。その結果，利益，指導意欲，参照など，コーチのポジティブな勢力を認知している選手の努力帰属が高く，動機づけにとって望ましい帰属と関連していた。一方，罰勢力を認知している選手ほど負事態の原因を能力不足に帰属する傾向が認められ，選手の動機づけにネガティブな影響を与える可能性を示唆するものであった。

以上の研究からもわかるように，コーチが選手に行う指導の効果は，その背景，あるいは基礎となる社会的勢力の種類によって異なることが示唆される。したがって，コーチがたとえ同じ指導を行ったとしても，選手がコーチの社会的勢力の基礎にどのような勢力を認知しているかによってその影響力の程度は異なり，結果としての指導効果も違ったものになると考えられるのである。

ところで，コーチの指導の効果を問題にする場合，選手の競技成績がどのように向上したかという観点は重要な側面の１つである。しかし，運動部活動の指導や運営という観点からみれば，選手が運動部活動全般に対してどれほど適応しているかという問題も重要であると考え

＊島根大学教育学部保健体育研究室
＊＊山梨大学教育学部保健体育研究室

られる。なぜなら，運動部活動全般に対する適応の程度は，競技成績の向上を規定する要因の１つと考えられるからである。

そこで本研究では，コーチの社会的勢力の認知と選手の適応感との関連について検討する。コーチの社会的勢力が選手の運動部活動全般に対する適応感とどのような関係にあるかを検討することは，選手が精神的に健康な状態で運動部活動を続けられるかを規定するだけでなく，練習行動や競技成績およびその後の人格適応にも影響を及ぼす（桂・中込，1990ｂ）ことを考えると，運動部活動の指導・運営にとって重要な問題と考えられるからである。

具体的には，コーチの有する社会的勢力の違いがそのチームに所属する選手の適応感にどのように影響するのか，また，各選手がコーチに対して認知している社会的勢力の違いによって，適応感がどのように異なるかを明らかにすることを本研究の目的とするものである。

方　　法

調査対象

Ｓ県及びＹ県内の私立・公立の中学校・高等学校のバレーボール部36チームで，部員の総数は，中学生316名（男子149名，女子167名），高校生301名（男子136名，女子165名）の計617名であった。なお，36チームの指導者は，すべて男性であった。

手　続

質問紙は，コーチの社会的勢力を測定する尺度と部員の運動部活動における適応感を測定する尺度からなっている。なお，本研究では分析の対象としていないが，コーチのリーダーシップ測定尺度，コーチからの被影響感・満足感尺度，部員の競技達成動機尺度（ＴＳＭＩの一部）も含まれる。

1.　調査用紙の作成

(a)　社会的勢力測定尺度

森他（1990）によって抽出されたコーチの社会的勢力の基盤に基づいて，伊藤・豊田・遠藤・森（1992）が作成した尺度が用いられた。測定できる内容（下位尺度）は，利益勢力，親近・受容勢力，指導意欲勢力，専門勢力，参照勢力，罰勢力，正当勢力の７つであり，各勢力尺度４項目×７尺度の計28項目からなっている。なお，Podsakoff & Schriesheim (1985) の社会的勢力の測定における反応バイアスの回避に関する指摘を参考に，項目の表現を修正したものを用いた。項目の具体的内容は，以下に示す通りであり，被調査者は，「あなたのクラブの監督に対する気持ち」としてあてはまる程度を，「非常にそう思う」（６点）から「まったくそう思わない」（１点）までの６段階尺度で回答を求められた。

利益勢力
- 私が監督の指示に従うのは，私のためになるからである。
- 監督の言う通りにすると，うまくいくことが多い
- 監督の指示に従うのは，監督が私の欠点を直してくれるからである
- 監督の指導で，技術や記録が向上することが多い

親近・受容勢力
- 私は，監督が好きである
- 私は，監督に親しみを感じる
- 監督は，私のことをよく理解していてくれる
- 監督は，私を信頼している

指導意欲勢力
- 監督は，私のことを本当に考えてくれている
- 監督は，練習に参加することが多い
- 監督は，まじめな人である
- 監督は，熱意を持って私に指導してくれる

専門勢力
- 監督は，良い成績や記録を持っている
- 私は，監督を技術的に尊敬している
- 監督は，私よりも知識や技能（経験）が豊富である
- 監督は，この競技（種目）のことをよく知っている

参照勢力
- 監督は，私のよいお手本である
- 私は，監督を頼りにすることが多い
- 私は，監督を人間的に尊敬している
- 私は，監督を信頼している

罰勢力
- 私が監督の言う通りにするのは，監督から叱られるのがいやだからである
- 私が監督の意見や指示に従うのは，監督からの罰がこわいからである
- 私は，監督の指示に反抗する勇気はない
- 監督に逆らうと，あとあと面倒なことが多い

正当勢力
- 指導者である監督の言うことは，守らなければならない
- 選手である私は，監督の指示に従うべきである
- 監督と選手という立場を考えると，私が監督の指示に従うのは当たり前である
- 監督は指導者だから，私が監督の言うことを受け入れるのは当然である

(b) 適応感評定尺度

桂・中込（1990 a）が中学から大学における運動部員を対象にした研究で，運動部活動における適応感を評定するために作成した尺度（Adjustment Scale for School Teams：ASST）の短縮版（桂・中込, 1990 b）を使用した。測定できる内容（下位尺度）と項目数は，運動部活動における総括的適応感2項目とその適応感を規定する5つの要因，すなわち「部内における自己有能感」，「部の指導者・運営」，「制約・束縛感」，「種目・部活動へのコミットメント」，「対チームメート感情」の各6項目の計32項目からなる。具体的な項目内容は，以下の通りであり（rは反転項目を示す），回答は「非常にそう思う」から「全然そう思わない」までの7段階尺度で求められる。

運動部活動における総括的適応感
- 今の部に入ってから，これまでの私の部での生活は，全体としてうまくいっている
- これからの私の部での生活は，全体としてうまくいくと思う

部内における自己有能感
- 私の運動能力（運動神経）で，部の活動についていける
- 私の体格（体型）は，部の活動に向いている
- 技術に関して，私は部の指導者や仲間の期待にこたえることができる。
- 私は，自分の努力に応じた技術を身につけてきている
- 私は，部にとって必要な人間であると思う
- 部の中で，私には，果たすべき役割がある

部の指導者・運営
- 私は，部の指導者に満足している
- 部の指導者は，私をよく理解している
- 私の部は，選手ひとりひとりの意思を大切にしている
- 私は，選手の起用法に満足している
- 部の中に，私に，技術について適切なアドバイスをしてくれる人がいる
- 私は，現在の練習方法に満足している

制約・束縛感
- 私は，部の活動と勉強を両立できないで困っている（r）
- 部に入っていることで，私は自分のやりたいことができなくて困っている（r）
- 私には，部の中でやりたくない仕事が多い（r）
- 部にかかる費用が多いので，私は部の活動を続けていくのが困難である（r）
- 部の活動日数は，私にあっている
- 私は，部のきまりに不満がある（r）

種目・部活動へのコミットメント
- 部に入っていることは，私の将来に役立つ
- 部に入っていることで，私は人間的に成長する
- 私は，目標を持って部の活動をしている
- スポーツの中では，今やっているスポーツが自分の能力を最もいかすことができる
- 今やっているスポーツで，私はさわやかな汗を流すことができる
- 部の練習以外の時でも，私は今やっているスポーツのことを考えることがよくある

対チームメート感情
- 私は，部の仲間から取り残されたような気持ちになることが多い（r）
- 私は，部の仲間に満足している
- 部の仲間は，私のことをわかってくれている
- 私は，部の同級生どうしの関係に満足している
- 私は，部の上級生と下級生の関係に満足している
- 私には，部の中に悩みをうちあけられる仲間がいる

2. 調査の実施

調査は，1992年10月から12月にかけて，各クラブの顧問の教師に依頼し，実施した。

結果と考察

1. コーチの社会的勢力とチームの適応感との関係

コーチの保持する社会的勢力の違いが，そのチームに所属する選手の適応感にどのように影響するのかを明ら

Table 1.
ASST総得点を目的変数とした重回帰分析(n=36)

説明変数	標準偏回帰係数	F 値
利益	0.693	3.96+
親近・受容	0.109	<1
指導意欲	0.132	<1
専門	−0.276	<1
参照	0.128	<1
罰	−0.351	9.06**
正当	−0.051	<1
重相関係数	0.874 F (7, 28)=12.95**	

+ p<0.10,　** p<0.01

かにするために，各コーチに付与されたそれぞれの社会的勢力得点の平均値を説明変数とし，各チームごとに算出したＡＳＳＴ総得点を目的変数とした一括投入法による重回帰分析を行った。Table 1 にその結果が示されている。

まず，重相関係数をみると，1％水準で有意な値を示していた（R＝0.874）。次に，各勢力の標準偏回帰係数は罰勢力において有意な負の値を示した（β＝－0.351，p＜0.01）。これは，コーチが社会的勢力として罰を有する程度が高ければそのチームの選手の適応感は低く，逆に，それが低ければ，適応感は高いという関係にあることを意味している。

罰勢力は，コーチからの罰の脅威を背景とする勢力であり，選手にとって本質的に好ましいものではない。また，罰勢力を強く保持するコーチの指導を受ける選手は，競技力向上を目的とする練習行動よりもコーチからの罰を回避することに常に気を配っておく必要があろう。したがって，コーチからの罰を背景とした勢力が，選手の適応感を低下させることは当然のことと考えられる。

次に，利益勢力の標準偏回帰係数は，有意な傾向を示す値が得られた（β＝0.693，p＜0.10）。すなわち，コーチが社会的勢力として利益勢力を有する程度が高ければそのチームの選手の適応感は高く，逆に，それが低ければ，適応感は低いという傾向が示唆されるのである。ここで，利益勢力とは，コーチの指導に従うことが技術向上などの選手自身の利益につながるという認知に基づく勢力であり，技術の向上や試合での勝利を目的とする選手にとってコーチが利益勢力を保持していると認知するか，しないかは，極めて重要な意味を持つものと考えれる。したがって，コーチの指導が自己の利益にとって有意義であるという認知に基づく勢力が選手の運動部活動全般に対する適応感を高める方向で影響するのは当然のことと思われる。

一方，親近・受容，指導意欲，専門，参照，正当の各勢力の標準偏回帰係数は，有意な値を示すものではなかった。したがって，これらの勢力をコーチが有する程度と選手の適応感には低い関係しかないことがわかる。しかし，この分析はあくまで適応感尺度の総得点を目的変数としたものであり，コーチの社会的勢力と適応感尺度の各下位尺度との関係を検討したものではない。そこで，コーチの社会的勢力と適応感尺度の各下位尺度との関係をさらに検討するために，総括的適応感を除く各下位尺度それぞれを目的変数とした重回帰分析を行った。Table 2 は，その結果を示したものである。

重相関係数をみると，「対チームメート感情」を除いて，0.633 から 0.954 と有意な値を示していた。このことから，コーチの有する社会的勢力の程度は，選手の適応感のうちチームメートに対する感情と低い関係しかないことがわかる。「対チームメート感情」は，チーム内における選手間の関係が問題となることから，他の適応感下位尺度と比較してコーチからの影響は相対的に低いと考えられる。したがって，コーチが保持する社会的勢力の程度と関係が認められなかったものと思われる。

次に，有意な重相関係数を示した下位尺度における各社会的勢力の標準偏回帰係数から各下位尺度に対する相対的影響度をみていくことにする。

まず，「部内における自己有能感」では，利益勢力が 0.789 と最も高い値を示し，10％水準で有意な傾向を示した。すなわち，コーチが利益勢力を保持していると認知しているチームの選手は部内における自己有能感が高

Table 2　各適応感下位尺度得点を目的変数とした重回帰分析(n=36)

説明変数	部内における自己有能感		部の指導者・運営		制約・束縛感		種目・部活動へのコミットメント		対チームメート感情	
	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値
利益	0.789	3.16+	0.286	1.77	0.694	1.57	0.782	3.69	0.164	＜1
親近・受容	0.600	2.81	0.442	6.48*	−0.705	2.48	0.236	＜1	−0.291	＜1
指導意欲	0.063	＜1	0.192	2.24	−0.162	＜1	−0.041	＜1	0.525	2.23
専門	−0.265	＜1	−0.059	＜1	−0.493	＜1	0.049	＜1	−0.377	＜1
参照	−0.348	＜1	0.231	＜1	0.727	1.10	−0.218	＜1	0.038	＜1
罰	−0.166	1.25	−0.131	3.28+	−0.623	11.22**	−0.322	5.55*	−0.319	2.63
正当	−0.205	＜1	−0.197	2.43	−0.043	＜1	−0.098	＜1	0.349	1.03
重相関係数	0.785		0.954		0.633		0.823		0.574	
	F(7,28)=6.43**		F(7,28)=40.4**		F(7,28)=2.68*		F(7,28)=8.38**		F(7,28)=1.96	

+p＜0.10，　*p＜0.05，　**p＜0.01

く，逆にこの勢力を保持していないと認知するチームの選手は部内における自己有能感が低いといえる。部内における自己有能感とは，自己の技能や部内における自己の存在価値に対する認知を示すものであり，技能や技術を高めることを部活動の主たる目的としている選手にとって基本的な要因である。また，利益勢力を強く有するコーチは，「練習と指示」という競技成績を高めるための技術や作戦に関わる指導を行うことを示すことが別の研究（伊藤他，1992）で明らかになっている。したがって，この要因に対してはコーチの指導が選手自身の技術向上に役立つという利益勢力に基づく指導を行うことが重要であることを示していると思われる。

「部の指導者・運営」では，親近・受容勢力が正の有意な値（$\beta=0.442$，$p<0.05$）を，罰勢力が負の有意な傾向を示す値（$\beta=-0.131$，$p<0.10$）をそれぞれ示していた。これは，コーチが親近・受容勢力を保持する程度が高く，罰勢力を保持する程度が低いほど，部の指導者や部の運営に対する認知がポジティブなものになることを通して選手の適応感は高くなり，逆に，親近・受容勢力が低く，罰勢力が高いほど，部の指導者や部の運営に対する認知がネガティブとなり，最終的に適応感は低下することを意味している。部の指導者・運営とは，指導者あるいは部の運営に対する評価であり，コーチが選手を受け入れたり，コーチに対して親近感を抱くことがこの適応に重要であることを示していると考えられる。また，罰勢力は親近・受容勢力と相入れない内容であることから，コーチが罰を背景とした指導を行うことは部の指導者・運営への適応にとってネガティブな影響を及ぼすものと思われる。

「制約・束縛感」では，罰勢力が1％水準で有意な負の値を示した（$\beta=-0.623$）。これは，コーチが罰を背景とした勢力に基づいて指導を行っていると認知する程度が高いチームの選手ほど，部活動を継続していく上での制約や継続する上での束縛感が強いと認知するのに対して，罰勢力を低いと評価するチームの選手は制約・束縛感が弱いと認知する傾向があることを意味している。制約・束縛感とは，部活動を継続していく上での制約や継続することに伴う束縛感であり，直接的にはコーチからの影響と関係がないように思われる。しかし，罰勢力を強く有するコーチは専制的行動をとりやすいことが伊藤他（1992）の研究で明らかにされていることから，コーチが罰を背景とした指導を行うことは選手の制約・束縛感を高める結果を導くことになるのであろう。

最後に，「種目・部活動へのコミットメント」では，罰勢力が5％水準で有意な負の係数（$\beta=-0.322$）を示した。コーチが社会的勢力として罰を有する程度が高ければそのチームの選手の種目・部活動へのコミットメントは低く，逆に，それが低ければ，選手のコミットメントは高いといえる。また，利益勢力が10％水準で有意な正の係数（$\beta=0.782$）を示していた。コーチが利益勢力を背景として指導を行っていると認知しているチームの選手ほど，自分が選択した種目や部の活動に価値を認め，積極的に関与している傾向があるといえる。

以上の分析の結果，コーチの罰勢力が，運動部活動における適応感評定尺度のうち「部の指導者・運営」，「制約・束縛感」および「種目・部活動へのコミットメント」に関わる適応を阻害する方向で関連し，さらに，ASST総得点を目的変数とした分析においても唯一選手が不適応に陥る可能性を示すものであったことに注目すべきである。これらの結果は，罰勢力がコーチからの被影響感やコーチに対する満足感を低下させるという森他（1990）の研究結果を支持するものであり，コーチの罰やその脅威を背景とした指導が選手の運動部活動における適応を阻害するのは当然であると考えられる。しかし，運動部の指導・運営に携わるコーチにとって，自らの勢力の基礎として選手に罰を認知されることは，選手の運動部活動における適応を低下させる可能性のあることを示す本研究結果は極めて重要であり，留意すべき問題であると思われる。

一方，利益勢力は，「部内における自己有能感」を高め，「種目・部活動へのコミットメント」を高める方向で影響を与えていた。利益勢力とは，コーチの指導に従うことが選手自身の技術向上に役立つという認知に基づく勢力であり，前述したように，コーチからの技術的な指導行動を背景としている。したがって，コーチが利益勢力を基礎として指導を行うことは，選手の技術向上だけでなく適応感を高める上でも重要であるといえる。

また，適応感下位尺度のうち部の指導者・運営に対する評価は，親近・受容勢力と関係していた。部の指導者・運営に対する評価は，指導に携わるコーチにとって重要な関心事であり，コーチに対する選手の適応を検討する上で基本となる問題である。したがって，コーチが選手との良好な人間関係を築くためには，コーチ自身が選手を受け入れ，選手との心理的距離を短縮する努力が重要であることをこの結果は示していると考えられる。

2. コーチの社会的勢力と選手の適応感との関係

先の分析では，各コーチの社会的勢力とそのチームに所属している選手の適応感との関係を検討した。そこでは，各社会的勢力も適応感もチームごとの平均値を指標

Table 3.　各変数の平均と標準偏差

	中学男子(n=149)	中学女子(n=167)	高校男子(n=136)	高校女子(n=165)
利益勢力	17.3 (4.18)	15.7 (3.81)	17.1 (4.97)	18.2 (3.77)
親近・受容勢力	13.1 (4.60)	11.0 (4.44)	14.7 (4.48)	14.2 (4.11)
指導意欲勢力	15.9 (3.86)	14.7 (3.73)	15.6 (5.16)	17.4 (4.02)
専門勢力	17.2 (5.10)	16.3 (5.12)	18.7 (4.97)	19.5 (4.54)
参照勢力	14.9 (4.97)	12.7 (4.84)	15.8 (5.24)	16.4 (4.69)
罰勢力	13.8 (4.44)	13.9 (4.65)	12.4 (4.29)	11.9 (4.14)
正当勢力	17.7 (4.00)	17.0 (3.94)	17.0 (4.18)	17.7 (3.81)
総括的適応感	9.7 (2.85)	9.3 (2.88)	9.8 (3.09)	9.7 (2.45)
都内における自己有能感	25.8 (6.21)	24.0 (5.63)	27.2 (5.96)	26.4 (5.20)
部の指導者・運営	25.7 (7.13)	23.9 (5.90)	27.8 (6.42)	28.1 (5.26)
制約・束縛感	26.8 (6.43)	26.5 (5.81)	25.7 (5.89)	26.2 (5.31)
部へのコミットメント	27.8 (6.25)	26.7 (7.08)	29.2 (5.98)	30.8 (5.07)
対チームメート感情	29.1 (6.80)	31.5 (5.80)	29.6 (6.31)	31.9 (6.82)
ＡＳＳＴ総得点	145.0 (27.32)	141.8 (24.27)	149.2 (25.71)	153.0 (21.80)

とし，個々の選手の反応は問題としなかった。ここでは，コーチの社会的勢力と選手の適応感との関係をより明確にするために，個々の選手の反応を単位とした分析を行う。Table 3には，以下の分析に用いた各変数の中学・高校および男女別の平均値（標準偏差）が示されている。

そこで，各選手がコーチに対して認知している社会的勢力の違いによって，適応感がどのように異なるか，すなわち各勢力の適応感に及ぼす相対的影響度を検討するために，それぞれの社会的勢力得点を説明変数とし，ＡＳＳＴ総得点を目的変数とした重回帰分析を，中学・高校それぞれに男女別に行った結果がTable 4である。

これをみると，重相関係数は，すべて1％水準で有意であった。そこで，各勢力のＡＳＳＴ総得点に対する標準偏回帰係数をみると，まず，中学生の男子では，親近・受容勢力と利益勢力が有意な正の値を示していた($\beta=0.318$, $p<0.01$; $\beta=0.222$, $p<0.05$)。中学生の男子では，コーチが選手を受け入れ，選手から親しみを感じられること，技術の指導を通して指導を受け入れることが選手に役立つと認知されることが運動部活動における適応を高めることに影響していると思われる。

中学生の女子では，親近・受容勢力と正当勢力が有意な正の値を示していた($\beta=0.384$; $\beta=0.217$, $p<0.01$)。コーチが選手を受け入れ，親しみを感じられる存在であること，また，それに対して選手はコーチの指導を正当なものと考える，すなわち，両者の信頼関係が中学の女子選手の適応に重要であることを示している。さらに，罰勢力が有意な負の値を示していた（$\beta=-0.300$, $p<0.01$）ことから，コーチが勢力の基礎に罰をおくことは，選手が運動部活動に対して不適応に陥る可能性を示すものと思われる。

高校男子では，親近・受容勢力が0.241と最も高い値を示したが，有意に至らなかった。したがって，高校男子の場合，コーチの社会的勢力と選手の適応感との関係は低いといえる。

高校女子では，まず，参照勢力が有意な正の値を示していた（$\beta=0.623$, $p<0.01$）。これは，コーチが社会的勢力として参照勢力を有する程度が高ければ選手の適応感も高いという関係にあることを示している。参照勢力とは，選手がコーチを同一視したり，一体感を感じることに基づく勢力であり，コーチの属性に対する魅力が大きいほどこの勢力の効果も大きくなる。したがって，高校女子選手を指導するコーチは，単に技術的な指導を行うだけでなく，選手との人間関係に配慮した指導が重要であることをこの結果は示していると思われる。

一方，専門勢力と罰勢力が有意な負の値を示していた（$\beta=-0.326$; $\beta=-0.215$, $p<0.01$）。コーチが専門的で高度な知識や技能を持っていると認知されたり，コーチの指導の背景に罰を認知すれば，選手の適応を阻害する可能性があると考えられる。罰勢力は，選手にとって好ましいものではないことから，選手の適応を阻害す

Table 4　ＡＳＳＴ総得点を目的変数とした重回帰分析

説明変数	中学男子（n＝149）		中学女子（n＝167）		高校男子（n＝136）		高校女子（n＝165）	
	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値
利益	0.222	4.22*	0.188	3.98	0.053	＜1	0.108	＜1
親近・受容	0.318	7.80**	0.384	13.00**	0.241	2.53	0.073	＜1
指導意欲	0.089	＜1	0.123	2.12	0.046	＜1	−0.020	＜1
専門	0.029	＜1	−0.050	＜1	−0.069	＜1	−0.326	6.90**
参照	0.086	＜1	−0.087	＜1	0.158	＜1	0.623	13.83**
罰	−0.101	2.37	−0.300	26.64**	−0.156	3.47	−0.215	10.80**
正当	0.052	＜1	0.217	8.35**	0.208	3.43	0.125	2.19
重相関係数	0.696		0.748		0.573		0.638	
	F(7, 141)＝18.68**		F(7, 159)＝28.15**		F(7, 128)＝8.88**		F(7, 157)＝15.38**	

*p＜0.05,　**p＜0.01

る方向で影響を与えるのは当然のことと思われる。しかし，コーチの専門的な知識は，選手が技術や技能の向上を図る上で重要な条件の１つと思われるにもかかわらず，別の研究結果（森他，1990）と同様に，選手の適応を阻害する可能性を秘めているのである。これは，選手一人一人の技術や能力水準にかかわらず，コーチがより高度な要求を行うことで選手に過度の緊張を与え，結果として適応を阻害するためではないかと考えられる。いずれにしても，専門勢力の適応感に対するネガティブな影響は高校女子選手のみにみられることから，これらの選手を対象とした指導では，コーチが有する高度な専門的知識や技能を背景としながらも，選手との信頼関係に基づいた個々の選手の能力水準にふさわしい指導が重要になるといえよう。

さて，以上の結果を発達年代間で比較すると，中学生では男女とも親近・受容勢力が有意な値を示しているのに対して，高校生ではその影響が有意に達しないという顕著な発達的変化が認められる。選手にとって，コーチが自分を受け入れ，親しみを感じられる存在であることは，高校生よりも中学生で重要なのである。部活動は，多くの場合中学生になって初めて経験するものであり，新しい集団に参入することに伴う不安や緊張は，中学での経験者が多く参加していると思われる高校よりも高いであろう。したがって，コーチとの望ましい人間関係を背景とする親近・受容勢力は，中学生の部活動に対する不適応を回避する上でより重要であると考えられよう。

次に，男女別で比較してみると，罰勢力において顕著な性差が認められる。つまり，罰勢力が選手の適応を阻害するという関係は，女子の場合，中学，高校ともに有意であったのに対して，男子ではいずれも有意なものではなかった。このことは，罰勢力が選手の適応を阻害する可能性が，男子よりも女子において大きいことを示している。このような性差は，異性を指導者とする女子の対人関係の特徴，あるいは部活動に対する動機づけ水準の性差などがその理由として考えられるが，いずれにしても女子選手の指導にとって罰に基づく指導を行わないことが選手の不適応を招かない上で重要であるといえよう。

なお，本研究では社会的勢力の効果を選手の適応感から検討したものであるが，発達年代および性別に行った分析結果は，その効果が必ずしも一義的に決定できるものではないことを示唆するものである。このことは，リーダーシップの効果を課題やフォロアーの特性を考慮して検討した研究（例えば，坂西，1989；蜂屋，1981）のように，コーチの社会的勢力の効果を検討する場合も，なんらかの個人特性を媒介変数とした分析を通してより明確になると考えられる。今後の研究課題としたい。

要　　約

本研究の目的は，1)コーチの有する社会的勢力の違いがそのチームに所属する選手の適応感にどのように影響するのか，2)各選手がコーチに対して認知している社会的勢力の違いによって，適応感がどのように異なるかを明らかにすることを目的とした，中学，高校の運動部員617名を対象に，28項目からなるコーチの社会的勢力を測定する質問紙と32項目からなる運動部活動における適応感評定尺度を実施した。

コーチの有する社会的勢力を説明変数とし各適応感下位尺度を目的変数としたチーム単位の重回帰分析では，

利益勢力が「部内における自己有能感」と「種目・部活動へのコミットメント」に，親近・受容勢力が「部の指導者・運営」にそれぞれ関係し，これらの勢力を強く有するコーチの指導の下にある選手の部活動に対する適応を高めることが示唆された。また，罰勢力は，「部の指導者・運営」，「種目・部活動へのコミットメント」，および「制約・束縛感」とそれぞれ負の関係があり，罰勢力を強く保持するコーチほど，選手の部活動に対する適応を阻害する可能性があることが示唆された。

選手個人のＡＳＳＴ総得点を目的変数とした重回帰分析の結果，中学生で親近・受容勢力が選手の適応と有意な正の関係があるのに対して，高校生では有意な関係が認められないこと，罰勢力と適応感とのネガティブな関係が，女子においてのみ有意であることが示された。

引用・参考文献

坂西友秀　1989　フォロアーのパーソナリティ特性の関数としてのリーダーシップ効果　教育心理学研究，**37**，107－116.

蜂屋良彦　1981　リーダー行動と部下の反応との関係に影響を与える状況要因について－部下の特性と課題の特性との交互作用の検討－実験社会心理学研究，**21**，17－24.

伊藤豊彦　1992　コーチの社会的勢力と選手の原因帰属様式　島根大学教育学部紀要（教育科学），**26**，37－44.

伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎・森　恭　1992　コーチのリーダーシップ行動と社会的勢力の認知との関係　スポーツ心理学研究，**19**，18－25.

桂和仁・中込四郎　1990 a　運動部活動における適応感を規定する要因　体育学研究，**35**，173－185.

桂和仁・中込四郎　1990 b　運動部活動における適応感評定尺度（ＡＳＳＴ）の妥当性の再検討　いばらき体育・スポーツ科学，**5**，13－19.

森　恭・伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎　1990　コーチの社会的勢力の基盤と機能　体育学研究，**34**，305－316.

Podsakoff, P.M., & Schriesheim, C.A. 1985 Field studies of French and Raven's bases of power: Critique, reanalysis, and suggestions for future research. *Psychological Bulletin*, **97**, 387-411.

田崎敏昭　1984　教師の勢力資源と児童のモラール　佐賀大学教育学部研究論文集，**31**，147－163.

田崎敏昭　1987　教師の勢力資源と生徒の逸脱傾向　日本教育心理学会第26回総会発表論文集，576－577.